

持続可能な地球のために —いま、世界の子どもたちは—

本書は、SDGsのなかからおもに子どもに関わる目標に注目し、テーマ別に以下の4巻で構成します。巻ごとのタイトルと、それにかかわるSDGsを紹介します。

1巻 **安心してeraしたい【貧困・飢餓】**
 目標1 世界中のあらゆる貧困をなくそう。
 目標2 あらゆる飢餓を終わらせよう。

2巻 **学校にいきたい【教育】**
 目標4 すべての人に公平で質の高い教育を。
 目標5 あらゆる場面でジェンダー(男女差)の平等をめざそう。

3巻 **健康で生きたい【保健・衛生】**
 目標3 すべての人に健康と福祉を。
 目標6 世界中の人が安全な水とトイレをえるように。

4巻 **温暖化をくいとめよう【環境】**
 目標7 すべての人が持続可能なエネルギーを得られるように。
 目標13,14,15 地球規模の気候変動と自然環境の破壊に対して。

「SDGs=持続可能な開発目標」は、巻末ページに掲載しています。

1巻 安心してeraしたい 【貧困・飢餓】 もくじ

地球を守る17の目標=SDGs	2
1、世界のおよそ8億人が「極度の貧困」	6
2、途上国の子どもの4人に1人は「飢餓」	8
3、発育障害の子どもたち【グアテマラ】	10
4、売られてゆく少女たち【インド】	12
5、スマホにひそむ危険な児童労働【コンゴ民主共和国】	14
6、帰る家のない子どもたち【バングラデシュ】	16
7、第二次世界大戦以降、最悪の難民数	18
8、紛争の犠牲になる子どもたち【シリア】	20
9、ロヒンギャの子どもたち【ミャンマー】	22
10、子ども兵士	24
11、2分おきにあらたな栄養不良児が発生【南スーダン】	26
12、「食品ロス」をなくして飢餓を克服しよう	28
未来ある地球のために	30



世界のおよそ8億人が「極度の貧困」

国連では、1日1.9ドル未満でくらす人を「極度の貧困」としています。日本円にすると、200円にもなりません。

食料だけでなく、水や衣類、住宅など、生きていくために必要なすべての費用を含めて1日200円足らず。だれもが受けられるはずの初等教育や、最低限の保健医療など、人としての権利を行使することもできません。

1900年代、アフリカやアジアなどの開発途上地域では、半数近くの人びとが「極度の貧困」でくらししていました。国連はこの状態を改善しようと2000年、「ミレニウム開発目標」を定め、「2015年までに極度の貧困を半減させる」と決めました。

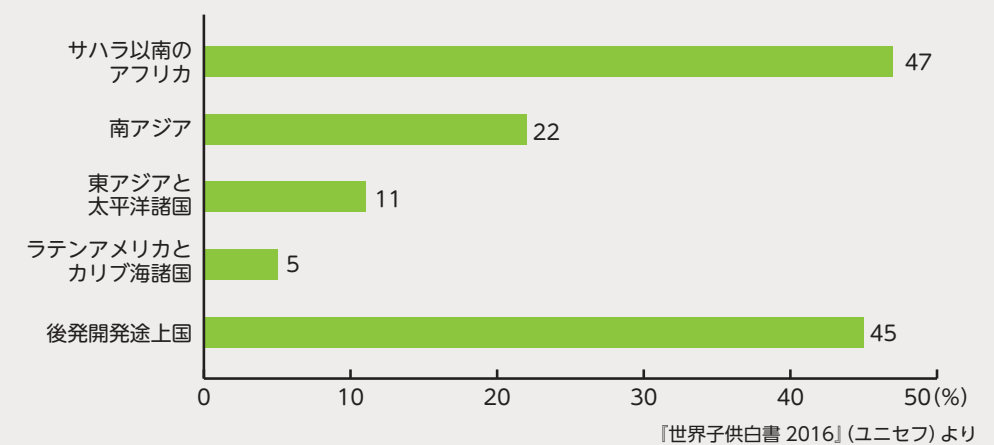
国連や各国の取り組みで、2013年には「極度の貧困」は世界全体の18パーセントに減少しました。しかし、紛争や災害などでさらに状況が悪化する地域もあり、いまなお、世界のおよそ8億人が、「極度の貧困」でくらししています。

とくに、サハラ砂漠より南のアフリカ地域では、全人口の47パーセントが極度の貧困状態にあり、その約半数は18歳未満の子どもです。

紛争の勃発や長引く内戦、気候変動による大規模な干ばつや水害などが、大きな原因です。

2015年に採択された「持続可能な開発目標＝SDGs」では、2030年までに極度の貧困をなくすことを目標にあげています。しかし、このままでは達成は難しい状況です。2030年には、「極度の貧困」でくらす世界の子どもの、10人に9人が、サハラ以南のアフリカにくらす子どもになると推定されています。

極度の貧困でくらす人の割合（単位：％）



© Jordi Matas/Save the Children

アフリカ最大のスラム街の一つとされるケベラにくらす子どもたち（ケニア、2015年8月撮影）。2015年のSDGsの採択に向けて、セーブ・ザ・チルドレンを始めとするNGO/NPOは、貧困・格差、不平等、気候変動の解決を求め、市民運動「アクション2015」を世界各国で展開しました。

途上国の子ども4人に1人は"飢餓"

「極度の貧困」状態にある人は、そのほとんどが飢えに苦しんでいます。

これは世界の9人に1人、およそ8億人になります。

開発途上国の子どもたちは、4人に1人が飢えて、栄養不足に苦しんでいます。

戦争や干ばつ、洪水、食料価格の上昇など、原因はさまざま考えられますが、

最大の原因は「貧困」です。

飢えがつづいて重い栄養不足になると、体の免疫力がおちて、下痢などの軽い病気でも命さえ危険な状態におちいります。

満5歳を迎えられずに、命を落とす子どものおよそ半数は、飢えによる栄養不足が原因です。



世界には、日本やアメリカのように経済的に発展した先進国と、様々な理由で開発が遅れている開発途上国があります。開発途上国の中でもさらに開発が遅れた貧しい国を、後発開発途上国、または最貧国といいます。後発開発途上国は世界に49か国あり、多くの国民が「極度の貧困」に苦しんでいます。

「極度の貧困」は2015年9月までは1日1.25ドル未満でしたが、国連や世界銀行の見直しにより、2015年10月から1日1.9ドル未満とされています。

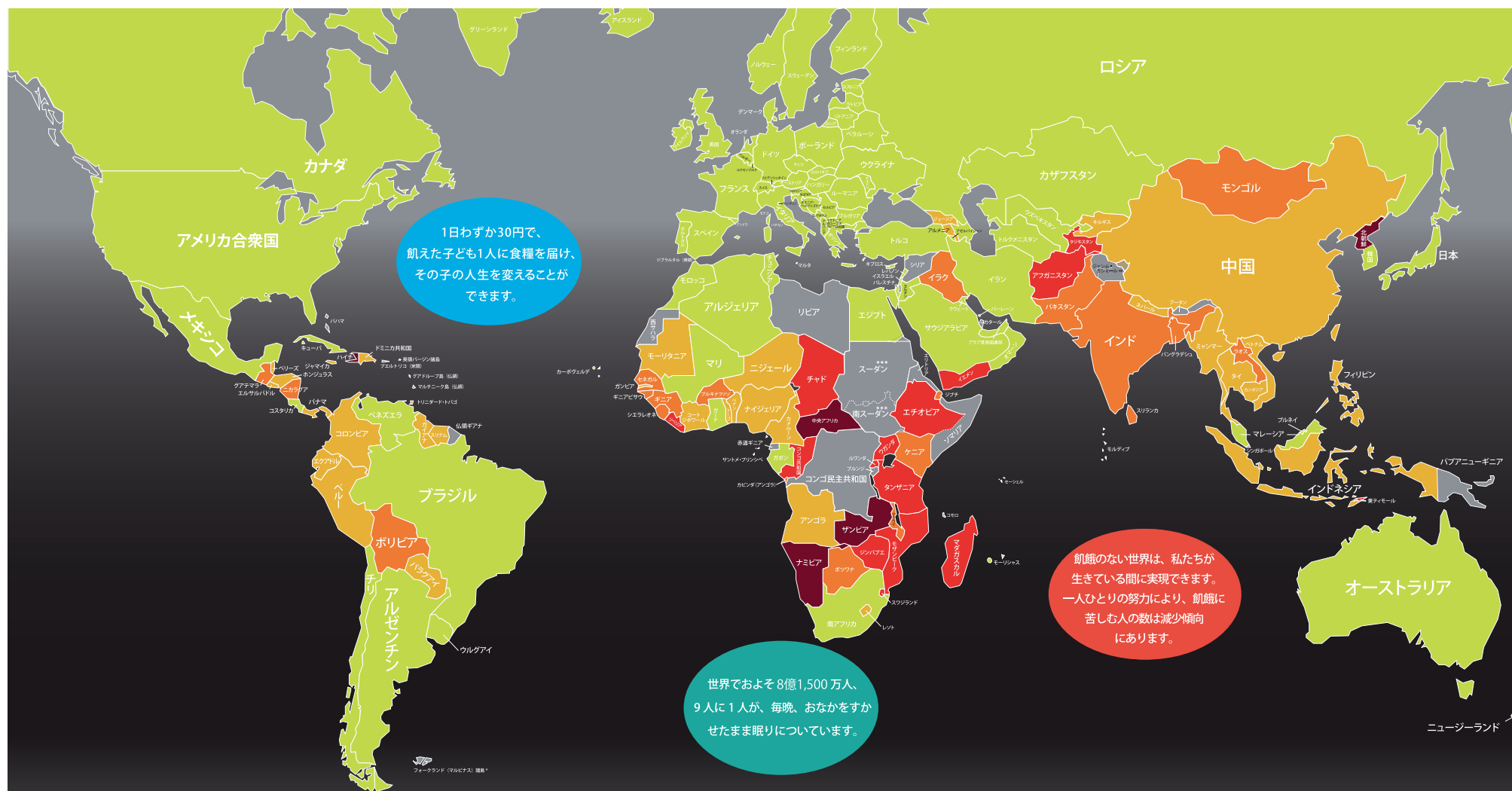
国連WFP ハンガーマップ 世界の飢餓状況

栄養不足の人口の割合 (2014年~2016年)



この地図は2014年から2016年の段階における、各国の総人口に対する栄養不足人口の割合を示しています。

© 2015 World Food Programme (WFP)



世界の紛争地域には、武器を持って戦闘に参加している子どもたちがいます。

貧困のため、みずから志願して兵士になる場合もありますが、多くはおとなにおどされたり、だまされたりして、入隊させられています。軍や武装勢力に誘拐されて、強制的に戦場へ送られることもあります。

子どもの目の前で家族を殺したり、麻薬を注射して子ども自身に自分の親を殺させたりして、二度と帰る場所がないようにしてしまう残酷な例も報告されています。

こうした子ども兵士は男の子だけではなく、子ども兵士のおよそ40パーセントは女の子です。戦闘に参加させられるだけでなく、スパイや連絡係、食事の世話や荷物の運搬など、さまざまな役割を与えられます。

女子の兵士は性的な暴力を振るわれることも多く、妊娠し、赤ちゃんを背負いながら戦闘に参加している人もいます。

子ども兵士は、世界に25万人以上いると推計されています。最も多いのはアフリカ中央部で、コンゴ民主共和国やソマリア、スーダン、南スーダンなどです。アジアや中東でも、ミャンマー、アフガニスタンなどで子ども兵士が報告されています。

ユニセフをはじめとする国連機関では、18歳未満の子ども兵士を禁止し、軍への指導や保護活動に当たっています。しかし、



© UNICEF/UN037266/Lomodong

これから武装グループから解放される子ども兵士
(2016年10月26日撮影)

保護され故郷へ帰ることができても、軍事訓練以外の教育を受けていないため社会復帰を果たすのは極めて困難です。また、過酷な戦闘シーンを目の当たりにしたり、望まない暴力行為を強制されてきたため、心を病んでしまう子どももいます。

リベリア出身のファヤ（仮名）は、11歳のとき、家族と歩いていたところを武器を持った集団に取り囲まれました。お母さんが助けを求めて走り出すと、いきなり銃撃され、殺されました。ファヤはお父さんとときょうだいたちとは別の場所に連れていかれ、銃の撃ち方を教えられました。戦場では最前線に連れていかれ、腕にけがを負いました。敵の兵士を捕まえたときには、年上の兵士に命令されて、敵を撃ちました。もし従わなければ、その場で自分が殺されていたでしょう。



ウガンダ出身の少女アイシャ（仮名）は、8歳のとき武装グループに誘拐されました。はじめは女性兵士が出産した赤ちゃんのお世話係でしたが、12歳になると兵士としての訓練がはじまりました。男性の兵士に暴行も受け、13歳で赤ちゃんを産みました。そのあとも子どもを背負ったまま戦闘に参加していましたが、足を2度撃たれて戦えなくなり、除隊させられました。



11 2分おきにあらたな栄養不良児が発生【南スーダン】

アフリカ中部の南スーダン共和国は、2011年7月にスーダンから分離、独立した新しい国です。

しかし、国造りが成果をあげる前に政府内の対立が激しくなり、2年後の2013年には、紛争が勃発しました。

戦闘の激しい地域では食料不足になり、おとなも子どもも、急速に栄養不良の状態におちいりました。およそ20万人が難民や避難民になり、25万人の子どもが重度の栄養不足になっています。

しかし、せっかく再建した病院や入院施設、栄養改善のための保健施設や安全な水の供給システムなども、わずか1年ほどで破壊されてしまいました。食料の配給も、保健や栄養のための支援は、国民のほとんどに届いていません。ユニセフでは、200万人以上の子どもや妊娠中の女性に対し、栄養不良の治療と予防のための緊急支援を行っています。

2015年8月には和平合意が実現しましたが、翌年には再び戦闘が激しくなりました。住民は身を守るために森や湿地にげ込んでくれています。そうした地域には、支援物資すら届きません。

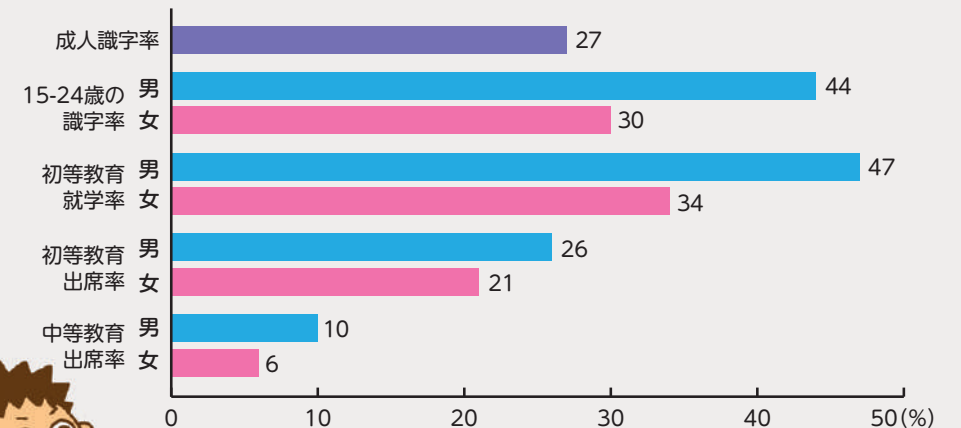
また、南スーダンには多くの子ども兵士がいます。

ユニセフは、子ども兵士を解放するよう武装勢力と交渉をつづけ、2015年から少なくとも2000人近くの子どもの子どもたちが解放されました。

しかし、一方で新たな子ども兵士の発生も後を絶たず、2016年だけでも、1,300人以上の子どもが兵士として軍に採用されています。いまま1万9,000人ほどの子ども兵士がいると推定されています。



南スーダンの実態



『世界子供白書 2016』(ユニセフ)より

